

北國空

泉鏡花作

全一章

月令に、冬日は雷、聲を収むとあれども、北國に  
ては雪雷と稱へて、白きものゝ降らんとするに方り  
ては、例年必ず雷鳴のあらざることなし。又此頃を  
期として、鰯獵の盛なれば、俗に此を鰯起とも謂ふ。  
師走中旬、一夜極めて、肩寒く、足の凍ゆる時、殷々  
として雷の轟くを聞けば、「もう、お正月の音がす  
るよ。」と母は添寝の兒を慰むるなり。

さるほどに寒威一層を加へ、夜は明くれども日光  
を見ず、淡墨に染まれる明窓の障子を開けば、暗雲  
漠々として、灰色の布は一天を包めり。果せる哉、  
其夕より罪々として降積む雪は、一夜にして七八寸、  
乃至一尺に餘るを常とす。

之より先、霜月の上旬より、霰降り、霽落ち、續  
きて雪降り、五六寸づゝも、積りては消え、消えて  
は積ること概ね日毎なれば、「今更、珍しきものが、

降りました。」と云ふ者無く、相見る人は眉を顰めて、「お寒うございます。」と挨拶するのみなり。

天色昏ニとして晝も黄昏の如く、甚しきは日中燈を点ずることありて、手許暗く裁縫に便ならず、議書も煩しく、凡て精小なる職業の礙げられざるはなし。然ればとて日俯取、大工、左官など粗大の業を營む者も、雪中は甚だ閑散なれども、かねて慙く有りと知りて備荒貯蓄を怠らざるが故に、各々坐食して飢渴を患へず、却りて善く働きたりし者は、平時の勞を慰むるを得なければ、實に冬の日北國の住民が、水き安息日と謂ふも可ならんか。

渠等が藁或は板を以て、雪垣を結繞らせる薄暗き家に閑居して、徒然に其日を暮す間、兒童は臆て來らんずる「お正月」の希望に輝ける愛らしき顔を、風に曝し、雪に撲たせて、仇氣なき聲々に、「雪は一升霰は五合」と手拍子鳴して囃しつゝ、兎の如く跳廻りて喜べり。

遊戯は「雪投」「雪達磨」或は「荒坊主」と稱へて、二間有餘の大道を作る。こは渠等小さき手には力及ばず、突飛なる壯佼の應援を仰ぐと知るべし。

氷迂りは盛にして、之に用ゐる「雪下履」なるものは、竹片を茶合の如く切りたるに緒をすげたるなり。竹草履とて普通の草履の裏に竹片を結附けたるもあり。

此等を穿ちて堅氷の上を走るに、さながら流るゝ如く、一二町は一息とも謂はず瞬間なり。されども多少の鍛錬を積まざれば、一齒にして蹈込らし、二三間にして投飛されい忽ち巖の如き氷に傷き、時として其危害謂ふべからざるものあり。親たちは口を酸くして此除惡の遊戯を禁ずれども、其心を知らざる兒輩は、其の忘れざる愉快の爲に、身體髪膚を忘れざるはあらず。

元來雪國にては池の上、田の面など、水ある處もて遊戯の場に充つるにはあらず、五尺六尺と積れる雪の上に通ぜる唯一條の路は、頻繁なる往來の爲に、

恰も普請後の道の蹈まれ／＼て平夷になりたる如くなれば、そのまゝ用ゐるに屈竟なり。

されども所用ある者も、此玉盤の如き雪の道を行かざるべからず、足腰の達者なる輩は、氷の辻の呼吸を以て歩むが故に無事なるを得れども、老脚の鎗跟たるは、一支も支へず覆されて、大怪我を蒙ること屢々なり。之を防ぐに庭下駄の後齒に釘を打ちて、「雪下駄」とて、用ふ。こは、釘の尖もて行く／＼堅氷の滑なる面を突砕きつゝ足懸を造るなり。或は藁灰を散布して踏むもあり。噫危き哉北國の路、生きながら剣の山を越ゆるなりけり。

兒輩よ、何ぞ早く家に歸らざる、路は明るけれど、日は既に暮れんとするなり。

御身等の母は、好き物を作りて御身等を待つこと久し。好き物とは何ぞ。鹽鰯の糟汁是なり。

鰯は冬籠の佳肴にして、家々に二三尾を購ひつ。久しき貯蓄に堪ふるため、強き鹽を施したれば、焙りて其肉を食ふさへ鼻頭に汗するばかりなり。汁は

温あたきが取柄とりえとて、多量たりにやうの酒さけの槽かすをとかして濃こきこと宛然さながらとろゝの如ごときに、件くだんの鹽鱒しほぶりの肉にくの殘物ざんぶつを取交とりまぜて汁鍋じるなべの中なかに刻入きざみいれ煮立にたての揚氣ゆげの濛々もう／＼たるを、其そのまゝ大なる塗腕ぬりわんに装出よそひだし、一家打寄かうちよりて之これを啜すくる。晚食ばんしょくの一室しつには、時ときならぬ霞棚かすみたなび引ひきて朧月おぼろつきの趣おもむきあり。されば三椀わんの熱羹ねつかうに、春風しゆなづたぢま忽たちち腸胃ちやうゐに入りて、一夜やの春はるを占しむるを得うべく、酒量しりやうなき婦女ふぢよたちは、これにも醉ゑひて面おもてを染そむるも可笑をかし。

こゝに最もとも愛あいすべきは雪ゆきの夜よの炬燵こたつにこそ。雪國ゆきくにの人の家いへ、といふ名なには、必かならず一個以上こはいじやうの炬燵こたつを含まふくむものと知るべし。

親おやこ子こ、夫婦ふうふう、兄弟きやうだい、姉妹しまい、四角しかく八面はつめんに押並おしならびて、隔意かくいなく、作法さほうなく、雑談ざつだん笑語せうご和氣わき霽々あいなたる家の外いへに、夜よもやゝ闌たけて押おし詰つまりたる年の暮くれながら、人じん跡せきやう／＼絶たえて、最靜いとじつかに雪ゆきのみ獨ひとり降ふりしきる時とき、重おもたげなる跽音あしおときた來きたりて軒下のきしたに留とまりぬ。

良やゝありて下駄げたの雪ゆきを落おさんとて敷居しきゐに爪先つまさきを打當うあたつる音おとは聞きこゆ。「唯今たゞいま開あけます。」と二聲ふたこゑ三聲さんこゑ内うちよ

り應おうずれども、猶なほほと／＼と訪おとひて已やまず、「應おう々  
といへど敲たくや雪ゆきの門かど」と實げに是これなり。

戸とを開あくる間まも遅おそしと入いりくるは、兒じ輩はいの常つねに兩り手やうて  
を擧あげて勸くわんげい迎げいせる、話はな上手じやうずの伯お父ぢやま様まなり、頭づきん巾も合かつ  
羽はも眞ま白つしろになりて鷺さぎの如ごとくなるを、家か人じん等ら箒はうきもて掃はら  
落おとすを待まちて、打うち笑ゑみつゝ炬こたつ燵すに進すすみ來きれり。

さて渠かれも團だん樂らんの筵むしろに列つらりて、兒じ輩はいが例れいの如ごとくおも  
しるき物もの語がたりを聞きかせよと謂いふがまゝに、咳がい一がい咳がいして  
徐おもむに説とき出いだせり。

愛あいらしき兒こよ。御おん身みは今いま伯お父ぢやまが内うちに入いらんとして、  
少しばし時の軒きした下したに躊ため躇らひたりしを知らん。實げに子よが門かど口ぐちに  
來きたりし時とき、白しろ無む垢くの衣いを絡まとひて、同おな一じ色いろの被かつきを被かぶ  
る、一いっ個こ美うつくしき上じやう臍いふあり。此この家やの軒の下きしたにたゞすみ、頻しきり  
に内うちを窺うかがひしが、來きか懸ゝりし子よの姿すがたを見るみより、聲こゑを  
密ひそめて開ひらけるやう、「いかに小こ兒どもに縁えんある人ひとよ。妾わらは  
は大おほ雪ゆきの夜よを籠こめて、何いづ處ちにもあれ幼を兒さなある家かない内ないを  
ば窺うかがひ歩ある行く婦を人んななるが、獨ひとり此この家やの幼を兒さなは慈じ愛あい深ふか  
き母はが其その袖そでを以もつて犇ひしと其その行かう爲ゑを蔽おほひつゝ、妾わらはの目めを

遮るため、其善悪を知るに由なし。願くは御身秘  
することなく、渠に就ての一切を語られよ。賞すべ  
くば之を賞し罰すべくば之を罰せん。」と。

予は嘗て御身が種々の悪戯を爲して、母を困らす  
を知りたれば、ありやうに打明けんかと一度は思ひ  
しが、待て、然かせんには彼の上臈且處に何等かの  
手段を以て、我が可愛き兒を罪し給はんと、「否、  
某が甥はよく母の言に従ひ、大人しく候へば、御褒  
美をこそ遣はされ度きものなれ。」とまめやかに告  
げたるに、嬉しげに莞爾と笑みて打頷き給ふと見え  
し、紛々たる雪に紛れて消失せたりし眞白き扮装の  
上臈は、一町ばかり彼方なる、御身が悪戯朋達の門  
に朦朧として露れ給ひ、雪垣の邊を歩きつ戻りつ、  
内の様子を窺ひたり。之は疑ふべくもあらぬ雪上臈  
なり。上臈は蓋し白きものゝ美なる精靈にして、冬  
季小兒等の賞罰を司どり給ふ神女にこそ。

疑ふを休めよ、御身が父と母と姉と與に、平和な  
る、幸福なる此の團樂をなし能ふは、皆この伯父が  
執成に因りて、善き幼兒を賞したる、雪の神女が賜

なりと。

彼の伯父が所謂雪上臆なるものは、雪の夜に於ける一種の現象なりとす。

元來雪の大に積れる時は、幅三四間の道路と雖も、巨蛇蜿蜒、唯一條人の一人漸く通行し得べき程の細き雪道の開くのみなれば、夜半往來の人傍の雪溜に踏込まざらんため、傍目も觸らで足許を見詰めて行く、眼に遮るは唯銀沙渺々として他に物色を見ざるを以て、素白に眩せる視線の不圖他に轉ずるトタン、眼球に映ずる處の、森、家、垣根など、何等か物體の作用に困りて、橋の上、軒端、山の端、或は松の梢などに、髣髴たる神女の姿を認む、これ蓋し一種異様の幻影なり。

【完】